

● シリーズ 私の見た日本 Vol.243

『内部』と『外部』の転回
—私の見た日本の建築・村・都市—

余 鵬正 (Yu Pengzheng)



中国江西省出身。2020年、法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程修了。現在、同研究科博士後期課程在籍。都市・建築の空間形態を専門とし、設計組織ADHにて実務と研究の両面から建築設計に取り組んでいる。

西洋の学術的な文脈では、「オリエンタリズム (Orientalism)」という言葉は、西洋の視点から世界を描き出す一つの態度を指して用いられてきた。書くことや分類すること、語ることを通して「東洋」の像を組み立てていく、そのような立ち位置である。海外で生まれ育ち、その後日本へ留学した私も、ときに自分がそれに似た場所に立っているのではないかと感じることもある。

そうした違和感を、あるときとても具体的な私たちで突きつけられたことがあった。

かつて日本に来る前に、建築を専門としない友人に日本の建築について話したことがある。私はいつもの癖で、空間構成やコンセプト、歴史的な意味から説明を始めた。話を聞き終えた友人は、一枚の打放しコンクリートの建築の写真を指さして言った。「この建築、何か語りかけてくる感じがするね」。

ほとんど専門用語を含まないその一言が、私の胸に強く残った。知識として理解する建築の外側に、もっと直感に近いかたちで受け取られる建築のあり方があるのではないか。そう思ったことが、日本へ留学する決め手の一つになった。

日本に来てから、「外部にいる」という感覚は、建築理論を学ぶ過程でも繰り返し立ち現れるようになった。修士課程のとき、私は読書会に参加した。くじ引きで一冊の本を受け取り、一年間それを読み込み、議論し続ける。その年に割り当てられたのが、磯崎新と篠山紀信による『建築行脚 (4) きらめく東方』(六耀社)だった。この本は、建築を作品のカタログとして整理するものではない。歩きながら見て、語りながら再発見し、光や足元の高低差、曲がり角の先で感じる圧迫や解放といった具体的な感覚から話が始まり、やがて「空間がどのように身体に作用するのか」という問いへと開かれていく。磯崎

新は空間を「突然訪れてくるもの」のように描き、それは身体が溶け出し、周囲の空間へと流れ込んでいくかのような感覚を伴う。

だからこそ、いわゆる「難しい本」を読むことも負担にはならなかった。概念を覚えることより、言葉を経験の側へ引き戻すことが大切にされていたからだ。——ある建築の中で、光やスケール、動線によって呼吸や歩幅が変わったことはないだろうか。

その読み方は「外部から入っていく」感覚に近かった。はじめは知識でテキストを追いかけていたが、次第に歩みを緩め、自分の感覚が理解に追いつくのを待つことを覚えた。すぐには分からない自分を受け入れながら、少しずつ内側へ進んでいく——そんな読み方である。

この感覚は、2019年により具体的になる。その年、法政大学で磯崎新の特別講演会「東京は首都足りうるか——大都市病症候群」が開催され、私は学生スタッフとして会場に立っていた。細々とした作業ばかりだったが、「舞台の脇」に立ったことで、はじめて見えてきたことがあった。理論は標準的な答えを与えるものではなく、むしろ聞き手の立ち位置を調整していくものだ。身体や経験、責任を持ち込んだ瞬間、「観察者」から「参加者」へと立場が切り替わる。その小さなずれが、後に谷中銀座や新島で調査に入る際の拠りどころになった。

谷中銀座の調査には、奨学金に関連する課題として参加した。対象は商店街とその周辺、およそ1km。マップと位置関係図をつくり、道路の階層や公共空間、業種分布、人の流れといった視点で整理した。だが現場で行ったことは結局、歩き、記録し、確かめる、その繰り返しだった。私がとくに注目したのは、都市組織がどう引き継がれているかだった。論文では「道路幅の維持」「業態の整理」「文化活動の導入」といった言葉

が並ぶが、現場ではもっと回り道をする。どの路地がいまも生活の往来を保ち、どの街角が「とどまれる場所」になり、どの更新が目立ちながら周囲に馴染んでいるのかを、丁寧に見て回った。そして、もう一つ大切だったのが「聞くこと」だ。簡単な聞き取りを通して、この街の変化は誰のためなのか、観光客が増えたあと店主はどう調整したのか、どこまでが制度で、どこからが暗黙の了解なのかを確かめた。語りには主観や誤差もあるが、それによって街は、「測定可能な対象」ではなく、折り合いをつけながら成り立つ「日常のシステム」として見えてきた。今回の調査は、小さな作業の反復にすぎなかった。だが、その反復が私をこの文章の主題へ近づけてくれた。外から来た者として現場に入り、歩き、記録し、耳を傾けることで、いつの間にか「外部の観察者」から「内部の参加者」へと立ち位置が変わっていく。

やがて、そうした経験は私を東京の離島・新島へと導いた。東京・竹芝桟橋から高速ジェット船で最短およそ2時間20分。航程だけを見れば遠くないが、島に立つと、風や塩気、物資の補給のリズム、人々の営みの違いから本島との距離に気づかされる。

島では「抗火石 (コーガ石)」と呼ばれる火山岩が多く用いられ、石蔵や石垣、塀、さまざまな部材に使われてきた。集落の風景には、どこか「石の言葉」とでも呼びたくなる表情が宿っている。私たちが訪れたきっかけは、2019年の台風15号・19号によって、住居を含む島内各所に被害が出たことだった。

調査する側にとって「災害後」は手順の集まりだが、島の人々にとって生活は、壊れた風景のなかでそのまま続いていく。「台風のあと、どのようにするのですか」と尋ねたとき、返事は驚くほど淡々としていた。壊れたら立ち止まり、休

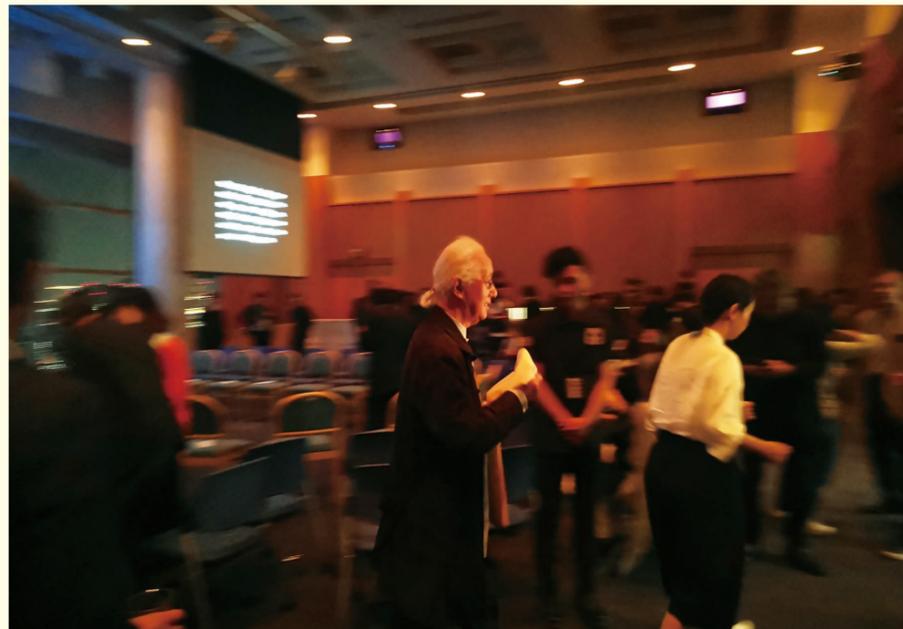
むなり片づけるなりして、終わったらまた歩き出すだけだ、と。そのとき私は、この島が目指しているのは「完全な復旧」ではなく、「まだ続けられる状態」を保つことなのだと気づいた。はじめ、私たちは倒壊した建物や補修痕を探し、構造や年代を問う、いかにも外から来た者の視線で現場を見ていた。だが、戸を叩き、話を聞くうちに、まず玄関先で立ち止まるようになる。あの夜、風がどう吹いたのか、どの路地が先に傷むのか——そうした語りを経て、島の建築を「自然と交渉してきた結果」として捉え直すようになった。抗火石は単なる材料性能の集積ではない。長い経験が壁や囲いに圧縮され、環境への判断が軒先や開口部、動線や高さに刻み込まれている。さらに驚いたのは、この石が島の外にもあることだった。銀座のビヤホールライオンでは、か

つて新島産の抗火石が天井まわりに用いられていたとされ、その理由の一つとして音環境への配慮が挙げられているという。離島は必ずしも切り離された場所ではない。石は切り出され、運ばれ、都市に組み込まれる。銀座でふと見上げた天井が、あの台風にさらされてきた島から来たものかもしれない、と思えるようになった。こうして振り返ると、「外部にいる」という感覚が消えたわけではない。ただ、その位置は確かにずれてきた。私は今も外から来た者だが、もはや単なる観察者ではない。大切なのは、方法や記録の向こう側で、現場が自分のリズムやスケールを書き換えていくことを受け入れる姿勢なのだと思う。だからこそ、抗火石の壁や石蔵、石塀は「語りかけてくる」ように感じられる。それは形式や工法の話ではない。風はまた吹くかもしれない。

生活は何度も中断されるかもしれない。そういった前提のもとで、場所が何度も自分を整え直し、歩み続ける、そのあり方が刻まれているのだ。

以上のような現場での経験から考えると、この不安定な時代のなかで日本や日本の建築を「どう捉えるか」と問われたなら、私はそれを、「続いていく一つの『転回』として理解したい」と答えるだろう。固定された答えに寄りかかるとはなく、世界に近づき、触発されながら、何度も自分を書き換えていく営みである。

それは同時に、「外部」と「内部」を往復する運動でもある。外から入る私たちが、自分の感覚を差し出すことをいとわなければ、外部はもはや単なる外部ではなくなり、内部もまた閉じたままではられないのだ。



左／2019年の法政大学特別講演での磯崎新氏 右上／谷中銀座の町並み 右下／東京都新島村の抗火石で作られた屋根



撮影／筆者